

## 複数形の歴史の語り方—— ジーナ・アポストルの *Insurrecto* (2018) にみる米比戦争とバランギガ虐殺

佐久間 由梨

フィリピンは、スペイン植民地支配（16世紀～）、アメリカ植民地支配（1898-）、日本による占領（1941-45）を経て、1946年に独立した。いうまでもなくそれは暴力と抵抗の歴史でもある。このようなフィリピンの歴史を、文学はいかに描きだしているのか。

本研究ノートでは、フィリピン系作家ジーナ・アポストル（Gina Apostol [1963-]）の小説 *Insurrecto* (2018) が描く米比戦争とバランギガ虐殺に光を当てる<sup>1</sup>。米比戦争 (Philippine-American War, 1899-1902) は「忘れられた戦争」とも呼ばれてきたが（大井 2010, 26）、近年のアメリカ文学研究分野においては、米比戦争反対論者としてのマーク・トウェインの再評価が進むなか注目されている<sup>2</sup>。バランギガ虐殺は、米比戦争期にサマール島バランギガのフィリピン人民衆たちが、米国支配に抵抗すべく米兵を殺傷し、報復として米軍に大量虐殺された事件である。

結論を先取りすれば、「反乱者」というタイトルを持つ *Insurrecto* は、米比戦争期にアメリカ支配に抵抗すべく暴動を起こしたバランギガのフィリピン人民衆たちが、はたして「反乱者 (insurrecto)」だったのか、それとも「革命者 (revolutionaries)」だったのかを問い合わせなおす小説だ。米国主導の歴史においてはアメリカへの「反乱者」として記録される人々は、別の視点から語られた場合、帝国主義の蛮行に果敢に抵抗した「革命者」ともなりうる。本小説は歴史を複数の視点から語る文学形式により、米比戦争およびバランギガ虐殺の歴史解釈が、実に多様に存在することを伝えている。

歴史を問い合わせなおす試みは、21世紀という現代を、過去との連続性においてとらえなおす試みでもある。アメリカ支配期の暴力や拷問が、現在のロドリゴ・ロア・ドゥテルテ政権の麻薬撲滅戦争にも継承されていることを批判し、反超法規的暴力および反ドゥテルテ政権という立場を表明する本小説もまた、21世紀の文学的「反乱」あるいは「革命」に他ならない。以下、旅行記も交えながら、ジーナ・アポストルについて紹介し、*Insurrecto* を読解してみよう。

### 1. パグサンハン川と『地獄の黙示録』(1979)

フィリピン調査旅行の4日目にあたる12月27日、ヘルメットとライフジャケットを身につけ小さなボートにのり、パグサンハン川の川下りをした。一直線に落ちる白滝も美しいパグサンハン川は、熊野を連想させ、精霊が宿るような土地だった。この地は、フランシス・フォード・コッポラ監督の『地獄の黙示録』(1979) の撮影現場になったことでも有名である。撮影当

時、アメリカはベトナム社会主義共和国と国交を持っていなかったため、ベトナム戦争を描く『地獄の黙示録』はフィリピンで撮影された。調査旅行のガイドを担当してくださったナカムラエイコさんによれば、『地獄の黙示録』に登場するベトナム民衆たちは、フィリピン人により演じられているという。



船頭さん二人、乗客二人の小さなボートで川下り（川上り）。急流では船頭さんがボートを持ち上げて前に進むからビックリ。最後は滝に突っ込むというアクティヴィティ付きですが、人文研では滝は鑑賞するのみでした。

帰国後『地獄の黙示録』を鑑賞すると、確かに一行がカーツ大佐に会うために上る川は、私達が川下りを愉しんだパグサンハン川であった。そして、映画に映されるベトナム人たちがフィリピン人により演じられているという事実を知りながらこの映画を見ると、奇妙な感覚がわいてきた——『地獄の黙示録』は、ベトナム戦争をめぐる映画であるばかりではなく、米比戦争の記憶を呼び起こすパリンプセストでもあるのではないか。

このような私の憶測的感覚は、フィリピン調査旅行の3日目に訪問した書店で購入したジーナ・アポストルの*Insurrecto* (2018) を読み生れた。米比戦争を主題とする本小説には、架空のアメリカ人映画監督ルード・ブラーシ (Ludo Brasi) いう人物が登場する。ルードは「フランシス・フォード・コッポラの『地獄の黙示録』という非凡に挑戦しうる」奇才として、ベトナム戦争をめぐる映画を撮影するも、映画の成功後に姿を消し謎の死を遂げた人物として描かれる (11-12)。『地獄の黙示録』がフィリピンで撮影されたのと同様、ルードのベトナム戦争をめぐる映画もまた、フィリピン、サマール島のバランギガで撮影されていた。小説において父の死の謎を解明しようとする同じく映画監督の娘キアラ (Chiara) は、父の映画が表面的にはベトナム戦争を扱いながらも、その深層において米比戦争および——バランギガで発生した米兵によるフィリピン人民衆の虐殺——について描こうとしているのではないかと推測する。娘キア

ラはアメリカからフィリピンに赴き、フィリピン人女性通訳のマグサリン（Magsalin）を雇い、マニラからバランギガへの旅にでる。これは父の死の謎を解明するとともに、バランギガ虐殺という過去を再訪するための旅でもあった。映画監督キアラと、通訳兼ミステリー作家のマグサリンの旅物語に、二人が執筆するバランギガ虐殺を主題とする映画台本を挿入する小説 *Insurrecto* は、米比戦争およびバランギガ虐殺の歴史を現代において語りなおす試みなのである。

## 2. ジーナ・アポストル——フィリピンの「分裂・分断」と「複数性」

ジーナ・アポストルは 1963 年にレイテ島のタクロバンで生まれた。タクロバンは、バランギガ虐殺が発生したサマール島と近接する街である。アポストルは高校時代までをタクロバンで過ごし、米国のジョンズホプキンス大学の創作科に留学後、アメリカ人と結婚し、現在もアメリカに在住している。*Bibliolepsy* (1997) と *The Revolution According to Raymundo Mata* (2009) の両作品がフィリピン図書賞 (Philippine National Book Award) を受賞し、アメリカでのデビュー作となる *Gun Dealer's Daughter* (2010) が米ペン協会オープンブック賞 (PEN/Open Book award) を受賞するなど、現代において最も注目されるフィリピン系作家の一人である。

アポストルの作品は、フィリピン（人）という自己意識を、フィリピンを植民化してきた国々との関連において描きだすという特色を持つ。アポストルは 2018 年の講演 “How Do We Know the Things That Make Us” においてこう語る。

私の複数の世界の全てを、どのように自身の自己意識の一部として包括するのか、どのように分裂のなかに意味を見いだすのかについて探ることが、私がやらねばならないことです——私を作ったトラウマ、戦争、暴力のなかで。（325）

フィリピン（人）としての自己意識は、各国植民地支配および戦争や暴力の影響により、必然的に「断片・分裂（fragments, fractures）」を内包することを余儀なくされてきた。アポストルはしかし、トラウマ体験に基づく「断片・分裂」を「複数性（multiplicity）」とも言い表し、肯定しようともする。フィリピン（人）というアイデンティティが、各国支配の遺産ともいえる多数の言語や文化の混成により形作られていることは、もはや否定することも避けることもできない現実になっているからである。国家や自己のアイデンティティが無数に分裂しながらも、同時に複数の要素の総体としても認識されうるという逆説は、たとえば「私は自身をフィリピン人と呼びますが、私の中には多様な文化が存在しています」というアポストルの自己認識にも見て取れる（Apostol, “How” 325）。

「断片・分裂」あるいは「複数性」を肯定する態度が、歴史認識をめぐる複数の視点を肯定する姿勢と結びついていることは、アポストルのインタビューでの発言に明らかである。

米比戦争の物語には、一見すると、植民者と被植民者との二項対立があります。でも、たとえば私自身はフィリピン人として、植民者を自分の中に認めることができます。私は英語をしゃべります。英語で学び育ったからです。それに、植民者たちが、自身の中に被植民者の声を認識することもまた、非常に重要だと思いました。(中略)

アメリカが複数の歴史を理解することも重要だと思います。米西戦争期にフィリピンの解放者になりたかったという歴史、でも同時に戦争により生じた非人道性についても認識すること。両者の葛藤が存在しています。(Simon)

個々人の内に植民者と被植民者の双方が分かちがたく認められる場合があるように、個々の歴史の内にも、ときに矛盾する複数の解釈やヴァリエーションが存在する。いいかえれば、フィリピンの歴史は、決して単純な二項対立や、単一の視点からでは語りえず、常に複数形として存在しているのだ。このような状況を踏まえ、アポストルはフィリピンをポストモダン、さらにはポスト・ポストモダンとも呼ぶ(Diaz)。一般的な文学批評の文脈においてポストモダンとは、单一かつ絶対的な「大きな物語」が喪失し、断片化する時代精神を意味している。長きにわたる植民地支配により、自己像や歴史が断片化すると同時に複数化するフィリピンは、この意味において確かに(ポスト)ポストモダン的なのである。

### 3. 米比戦争とバランギガ虐殺——複数形の歴史の語り方

*Insurrecto* の小説形式もまたポストモダン的で、分裂・断片・複数性を内包する。本小説には三種の時間軸が存在する。①キアラとマグサリンが、マニラからサマール島のバランギガへと旅する現代、②キアラの父親ルードがベトナム戦争をめぐる映画をバランギガで撮影していたマルコス政権期の1970年代、③バランギガ虐殺が生じた1901年の三つである。この中で、②と③の時間軸をめぐる物語の一部は、キアラとマグサリンにより創作された映画台本という体裁で語られるため、それぞれに史実とフィクションというヴァリエーションが加わり、物語がさらに複数化することになる。こうして三種の時間軸に基づく物語と史実と映画台本とが、20章、2章、3章、21章、4章、22章というような時系列を無視した順番で進み、物語は時代や場所ばかりではなく事実と虚構とを行き来する形で断片的に語られていく。

*Insurrecto* の「決闘台本(duel scripts)」と題される第二部には、キアラが執筆したバランギガ虐殺をめぐる映画台本と、マグサリンがそれに加筆修正をした映画台本とがまるで「決闘」す

るかのように挿入され、物語のヴァリエーションがさらに増殖する。キアラ（アメリカ）とマグサリン（フィリピン）による複数の視点から、米比戦争とバランギガ虐殺が語りなおされていくのだ。ここでこの「決闘台本」が、両者の合意の元に創作されているわけではないことが重要である。キアラはマグサリンに自身の映画台本を渡したが、マグサリンが勝手に加筆修正したことに対する激怒している。

「あなたに修正してほしくて台本をあげたわけじゃないのよ」とキアラは前置きもなく言った。…

「台本を修正したんじゃなくって、」マグサリンは、言葉を注意深く選ばなければならぬことを自覚しながらしゃべり始めた、「翻訳の可能性を示しただけ。<sup>version</sup> 翻案ともいえるような。」

「翻訳なんて頼んでないの。」キアラはマグサリンを見上げた。「礼儀と思って台本をあげただけなのに。」…

「あなたは物語を取り換えてしまっているじゃない。<sup>version</sup> 翻案なんかじゃないわ。<sup>invasion</sup> 侵略よ。」「違う。私にそんな意図はないの。<sup>mirror</sup> 鏡という感じじゃだめかしら。」マグサリンはそう尋ねた。（96-67）

マグサリンがキアラの台本を翻案したのは、キアラ作のアメリカ人視点によるバランギガ虐殺の物語に、フィリピン人視点による歴史解釈を加えたかったからである。ここに、支配者側のナラティヴを、被支配者側のカウンターナラティヴにより書き換えるというポストコロニアル文学の特色を見いだすことも可能である。

とはいって *Insurrecto* が複雑なのは、キアラの歴史解釈がマグサリンの歴史解釈により完全に書き換えられてはいないことだ。マグサリンが「鏡」と呼ぶように、双方のヴァージョンは「決闘」しつつも互いを反映し合う関係性にあり、読者はどこまでがキアラ作で、どこからがマグサリン作なのかを正確に知ることはできない。いいかえれば *Insurrecto* は、キアラとマグサリンによる異なる歴史解釈のどちらか一方のみを正史とする立場からではなく、むしろ複数形の歴史こそが正史であるという立場から、物語を構築しようとしているのだ。

このように、過去と現在、史実とフィクション、フィリピンとアメリカの各視点から語られ増殖し複数化する歴史物語を紡ぐ *Insurrecto* は、バランギガ虐殺をめぐる少なくとも三種の解釈・ヴァリエーションを提示している。以下、各解釈の相違点をあぶり出してみたい。

### 3.1. アメリカ人男性による公式の歴史

一つ目の歴史解釈は、アメリカ人男性の視点による、公の歴史として流通するバランギガ虐殺の物語である。バランギガ虐殺の顛末を理解するためには、まずは米比戦争に至るまでのフィリピンの歴史を概観する必要があるだろう。フィリピンは16世紀にスペインの植民地となり、1898年にスペイン植民地支配に対するフィリピン独立革命が勃発し、米国がフィリピン革命を支援すべく介入したために米西戦争となる。勝利した米国はスペインからプエルトリコ、グアム、フィリピンを割譲され、「恩恵的同化」政策を実施したが、1899年にフィリピン革命軍がアメリカに宣戦し米比戦争が始まった<sup>3</sup>。米軍はフィリピンに強制収容所を設置し政治犯を収容するとともに、水攻めなどの拷問を導入し、フィリピン人民衆への諜報活動を行った<sup>4</sup>。

バランギガ虐殺は、米比戦争期に発生した事件で、*Insurrecto*によれば、フィリピン人民衆による駐屯米兵の殺害と、それへの報復として行われた米軍によるフィリピン民間人の虐殺の双方を指し示す(34)。事件は「アメリカ駐屯兵に対するフィリピン人たちの反乱」が「48人のアメリカ人の死、および22人の負傷者と4人の行方不明者」を出したことに幕を開ける(35)。これに対し、サマール島を統治していたジェイコブ・H・スミス准将は、「報復としてサマール島の10歳以上のフィリピン人男性全員の殺害を要請した」(35)。「殺し、燃やせ」を合言葉とする米兵は「3万人近くのフィリピン人たち、男性、女性、子供たちをなぶり殺した」(35)。小説には、史実として歴史書に記されるスミス准将の言葉も引用されている——「捕虜は必要ではない。殺しと焼き打ちをやってほしい。殺しと焼き打ちが多ければ多いほど、私はより満足する」(35)。米軍というアメリカ男性の視点から語られる公の歴史において、米兵に抵抗したフィリピン民衆は「反乱者」として犯罪者化されているのである。

### 3.2. アメリカ人女性による解釈

二つ目の歴史解釈は、キアラ作の映画台本という形をとって小説内に提示される。キアラの台本は、もっぱらアメリカ人男性の視点により語られてきたバランギガ虐殺を、アメリカ人女性の視点から語りなおそうとする。この試みのために、キアラは上流階級出身の白人女性写真家カサンドラ・チェイス(Cassandra Chase)という登場人物を創作する。カサンドラはフィリピン植民地支配に反対の立場をとるマーク・トウェインのエッセイ“*To a Person Sitting in Darkness*”に影響を受ける反帝国主義論者である(140, 279)。フィリピン原住民や駐屯米兵の写真を撮影するためにバランギガの米兵駐屯地に滞在していたカサンドラは、虐殺の犠牲となつたフィリピン人の遺体の写真を撮影した。アメリカに帰国後、カサンドラは写真を雑誌に掲載し、アメリカにセンセーションを巻き起こす。

キアラの映画台本において、カサンドラは有色人種を救う慈悲溢れる白人を意味する「白人

の救世主（“white savior”）の一例として描かれる（Kim）。フィリピンから帰国後の議会聴聞会において、カサンドラは自らがフィリピン人を帝国主義という悪から救い出す救世主であるかのようにこう訴える——「私たちはフィリピン人をスペインから自由にすることを願いました。私たちは嘘をついたのです。島々を占有してしまいました。嫌悪すると言ってきたはずの犯罪に手を染めてしまいました」（279）。カサンドラは、米比戦争期に米軍がフィリピン人を家畜のように収監し、水攻めをし、穀物、村々、豚、そして子供たちを焼き打ちにしたことを批判し、自らの写真がこのような蛮行からフィリピンを救済する手立てになりうることを仄めかす。キアラの歴史解釈は、帝国主義と虐殺を正当化するアメリカ人男性の視点から執筆された正史を、アメリカ人女性の視点から抵抗の意味を込めて翻案した成果なのである。

### 3.3. フィリピン人女性による解釈

キアラが創作した映画台本を読みマグサリンは「首をかしげた」、そして問う——「戦争期に女性の声を入れるのはよいこと。でも彼女〔カサンドラ〕がこんなにも——白人である——必要があるのだろうか」（122）。三つ目の歴史解釈は、マグサリンによって加筆修正された映画台本という形で提示されていく。マグサリンは、キアラの白人女性中心主義に疑問を持ち、フィリピン人女性の視点からバランギガ虐殺を語りなおそうと試みる。そしてマグサリンがキアラの台本に加えることになったのが、「彼女のヴァージョンのヒロインであるカシアナ・ナシオナレス（Casiana Nacionales）」だった（126）。カサンドラが架空の人物であることとは対照的に、カシアナはバランギガ虐殺においてフィリピン人民衆を率いた実在するフィリピン人女性である。マグサリンは、キアラ（カサンドラ）の物語にカシアナを挿入することで、カシアナが率いるフィリピン人民衆たちが、米軍の暴力に異議申し立てをし、フィリピンの独立を目指した革命者であったという解釈を新たに突き付けようとするのだ。マグサリンは言う——人々は「革命者だった」、「反乱者ではなかった」のだと（45）。

マグサリンの台本に登場するカシアナは、賢く勇敢なフィリピン人女性である。米比戦争期、カシアナの父親は穀物蔵を燃やせという米軍の命令を拒み、水攻めの拷問（water cure）を受け、収監された。カシアナは水攻めを「治療（cure）ではなく呪い（curse）」とみなし（205）、監獄から毎朝フィリピン人たちが労働のために放たれるのを見つめ、そこに父の姿を探した。カシアナは反乱計画を練り、村人たちをまとめ、フィリピン人女性たちを安全な場所へと避難させた。事件当日、米兵たちは普段と同じように朝食を食べていたが、食事を準備しているのがフィリピン人女性ではなく、妻や娘のスカートで女装したフィリピン人男性だったことに気付く者はいなかった。カシアナは監獄の鍵を米兵への色仕掛けで盗み、監獄を開放し、収監者と村人と共闘し、朝食を食べる米兵を襲撃し殺した。

正史はこれを、米兵 225 人が全滅した対ネイティヴ・アメリカン戦争である「リトルビッグホーンの戦い以来、アメリカ陸軍史における最悪の事件！」(277) とみなす。マグサリンの台本ではしかし、フィリピン人民衆による米兵の殺害は、民衆たちが生存のためにそうせざるをえなかつた出来事として描かれる。ゲリラを飢えさせるために水田を焼き、米兵へと食糧を提供することを命じられたフィリピン人民衆たちは飢えていた。そのような逆境を開闢すべく米兵殺戮を計画したカシアナが、「反乱者」として犯罪者化されているのはなぜだろうか。そうマグサリンは問うのだ。カシアナを「革命者」として再解釈するマグサリンの台本は、アメリカ人男性および女性による歴史解釈を、実在するフィリピン人女性の視点から抵抗の意味を込めて翻案した成果なのである。

version

正史とみなされる歴史には、つねに「翻訳」や「翻案」の可能性が開かれている。*Insurrecto* は、そのような複数形の歴史の語り方を教示し、読者が歴史を複眼的に感知することを促す小説であるといえるだろう。

#### 4. 米比戦争からドゥテルテ政権の麻薬撲滅戦争へ

*Insurrecto* は複数形の歴史解釈の可能性を示唆するとともに、米比戦争期における米国の蛮行と、21 世紀の麻薬撲滅戦争期における警察の蛮行とを結びつけるという意図を持つ。これを如実に示すのが、アポストルが *Insurrecto* を補完するべく作成したウェブサイト (praxino.org) だ。このサイトには米国国会図書館から取り寄せたバランギガ虐殺の死体の写真の数々が掲載されているが<sup>5</sup>、これらの写真はドゥテルテ政権期の麻薬撲滅戦争により警察に殺害された人々の死体の写真と対になるように配置されている。ドゥテルテは 2016 年の大統領選において麻薬撲滅戦争を公約として当選し、「就任半年で麻薬犯罪の容疑者を数千人規模で殺害するなど、民主主義の基本原理である法の支配を逸脱する行為に訴えている」ことでも知られる（井出 137）。

*Insurrecto*において、マグサリンはドゥテルテ政権による超法規的暴力が、植民地支配期の暴力行為を継承した結果であると考え、このように発言する——フィリピンでは「警察による拷問と殺戮には長い歴史があり、超法規的殺人はある意味、伝統であるとも言える」、そして「警察の取り調べおよび民衆鎮圧作戦は、すべてヘンリー・T・アレンの才能を継承するもの」なのだと（150）。米比戦争期の米軍司令官ヘンリー・T・アレンは、1913 年までに 300 万人のフィリピン民間人を殺した人物である。マグサリンは、このような植民地支配期の蛮行が、マルコス政権を経て現行のドゥテルテ政権による警察支配に継承されていると感じ批判しているのだ。

小説においてドゥテルテ政権の超法規殺人が批判される箇所は多々あるが、最も力強い筆致で描かれるのは、キアラとマグサリンがマニラからバランギガへと旅をする一場面だ。海岸沿いをバランギガにむかって走行する車に乗るキアラは、フィリピン人親子がバイクに二人乗り

をして通り過ぎ、後ろに乘る少女が棒付きキャンディーをなめながらキアラに手を振るのを眺める。続いてキアラはバイクに二人乗りをした警察官が通り過ぎるのを眺めるが、突然キアラの乗る車は停止する。車から降りたキアラが目撃したのは、ついさっきバイクで通り過ぎた親子の死体だった。親子は警官に銃殺されたのだが、フィリピン人ガイドはキアラに、父親が麻薬中毒者である可能性があり、それゆえに虐殺されたのだと説明する（245）。バランギガへと向かうはずのキアラの旅は結局、警察権力に虐殺された親子の死体と出会った地点で終わる。バランギガ虐殺という過去を終着点としていたはずの旅が、現代のデウテルテ政権期の暴力行為へと到達するための旅であったというのが、本小説のクライマックスの一つになっているのだ。

麻薬捜査を名目とした警察による蛮行が横行しているにも拘わらず、小説によればドゥテルテ政権は多くのフィリピン人により支持されている。たとえばマグサリンの叔父たちはテレビに映る「彼らの指導者、存在するあらゆる犯罪者を殺すと誓った麻薬撲滅戦争に憑りつかれたマッチョの言葉に、厳肅な態度」でうなずく信奉者として登場する（113）。米比戦争期に米軍によるフィリピン民間人虐殺が正当化されたように、21世紀の警察による蛮行もまた、国家事業として正当化され支持すらされているという現状があるのだろう。*Insurrecto* はしかし、反ドゥテルテ政権および反暴力というスタンスをとる。バランギガ虐殺とドゥテルテ政権期の警察蛮行との歴史的連続性を暴き批判する本小説を、現代における文学的「反乱」あるいは「革命」と呼ぶこともできるのだ。

## 5. おわりに——トンド地区の視察

本研究ノートは、ジーナ・アポストルの *Insurrecto* が米比戦争およびバランギガ虐殺をめぐる複数形の歴史の語り方を示す小説であると論じた。続けて、本小説が植民地支配期の暴力行為が現在の麻薬撲滅戦争に継承され正当化すらされていることを批判する意図を持つことを示した。最後に旅行記に戻り、本研究ノートを結びたい。

歴史のいかなる瞬間においても、暴力は社会の最底辺にいる弱者へと向かう。現在のドゥテルテ政権下において、麻薬撲滅戦争の名のもとに展開される警察暴力にさらされる人々は、ゴミ捨て場やスラム地区に住まう貧しい人々である。小説にはマグサリンが麻薬撲滅戦争についてのニュースを見る場面がある——「ゴミ捨て場、スラム、校庭の近く、国のある商店街のすべてに山積みされる死体のニュースを見た——死体に重なる死体」（113）。

私たちは調査旅行の最終日に、フィリピン最大のスラムと呼ばれたゴミ捨て場であるスマーリーマウンテンがかつて存在したトンド地区を訪れた。過去にはアーサー・マッカーサーやマイケル・ジャクソンやプリンスなどの要人も滞在したことのある高級ホテルであるマニラ・ホ

テルがある閑静な地区から、バスで 10 分ほど走り河を渡ると光景が一変し、スラム地区が続く。



スラム街の始まりともいえる川。川岸にはバラック小屋が立ち並ぶ。公営住宅は、かつては美しい建物だったというが、今は劣化しゴミが散乱する。スラム地区には屋台やバスケットボールの運動場もあり、子供たちが元気に遊んでいた。

私たちが訪れたトンド地区は、人々が密集して住まうスラムではあったが、驚くほどに住人達は親切で明るかった。アパートの部屋を見せてくれた家族は、娘が介護士の資格を取るために日本に実習を行っているのだと教えてくれ、スマホで娘さんと会話までさせてくれた。道端の子供たちは私たちに群がり、ガイドさんの質問にも楽しそうに答えてくれたが、少女の笑顔を見せたのは、ほとんどが虫歯になって変形してしまった前歯だった。私たちがバスに乗るのを見送るようについてきた少年の目からは涙が流れでていた。

恥ずかしながらスラム地区を訪れた時には、私はドゥテルテ政権による麻薬撲滅戦争の内実について無知だった。だがいまは、このようなスラム地区こそが、警察による不当逮捕や殺人の横行する現場となっているのではないかと感じずにはいられない。人文研調査旅行では、スペイン、アメリカ、日本による植民地支配の歴史を残す史跡を巡ったが、そうした過去の歴史は、私がこれまで思っていた以上に、スラム地区に住まう人々が日々さらされる現在の暴力と、分かちがたく繋がっている。

#### 参考文献

- Apostol, Gina. "How Do We Know the Things That Make Us." *Insurrecto: A Novel*. Soho Press, 2018, 321-328.  
---. *Insurrecto: A Novel*. Soho Press, 2018.

- Diaz, Glenn. "Gina Apostol on her New Book 'Insurrecto,' the Balangiga Massacre, and American Imperialism." *CNN Philippines Life*, 14 Dec. 2018, <https://cnnphilippines.com/life/culture/literature/2018/12/13/gina-apostol-interview.html>. Accessed 16 Apr. 2020.
- Kim, Serena. "'Insurrecto' Is A Bitingly Vicious And Funny Romp Through Filipino History." *Character Media: Asian Americans in Entertainment*, 4 Feb. 2019, <https://charactermedia.com/insurrecto-is-a-bitingly-vicious-and-funny-romp-through-filipino-history-gina-apostol-filipina-author-book-review/>. Accessed 16 Apr. 2020.
- Quicho, Alex. "Chaos Will Set You Free." *The New Inquiry*, 18 Nov. 2019, <https://thenewinquiry.com/chaos-will-set-you-free/>. Accessed 16 Apr. 2020.
- Simon, Scott. "An American And Her Filipina Translator Exhume A Massacre In 'Insurrecto.'" *NPR*, 10 Nov. 2018, <https://www.npr.org/2018/11/10/666360732/an-american-and-her-filipina-translator-exhume-a-massacre-in-insurrecto>. Accessed 16 Apr. 2020.
- 井出穰治. 『フィリピン——急成長する若き「大国」』 中公新書、2017年。
- 大井浩二. 「米比戦争からセントルイス万博まで——アメリカの帝国主義と反帝国主義をめぐつて」『二〇世紀アメリカ文学のポリティクス』 貴志雅之編集、世界思想社、2010年、25-55頁。
- . 『米比戦争と共和主義の運命——トウェインとローズヴェルトと《シーザーの亡靈》』 彩流社、2017年。
- 大野拓司, 寺田勇文編集. 『現代フィリピンを知るための61章』 明石書店、2009年。
- 藤井光. "'America' feat. Elvis Presley, 2018 Remix." 「現代アメリカ文学 ポップコーン大盛り」2019年4月18日、[https://note.com/kankanbou\\_e/n/n59fca65cda59](https://note.com/kankanbou_e/n/n59fca65cda59). Accessed 16 Apr. 2020.

<sup>1</sup> *Insurrecto* は2018年出版のため、私が調査した限りでは、現時点では学術論文の形式での先行研究はない。書評およびラジオ番組などでは紹介され高く評価されている(Diaz, Kim, Quicho, Simon)。日本では藤井光が本小説をアメリカ文化(エルヴィス・プレスリー)との関連にて紹介している。

<sup>2</sup> 米比戦争とアメリカ文学との関連性については大井浩二の研究を参照のこと。

<sup>3</sup> 「恩恵的同化政策」とは、アメリカの「自由や民主主義といった同国の建国時の普遍的な理念を掲げ、これらの理念がフィリピン社会で根付くよう、ある意味では貢献的な役割を担うというスタンス」(井出 119)である。

<sup>4</sup> フィリピンの植民地支配の歴史については、大野・寺田を参照のこと。米比戦争期の米軍の蛮行については、大井の『米比戦争と共和主義の運命』(とくに第四章「星条旗はためく下で——聖戦意識と残虐行為」)を参照のこと。

<sup>5</sup> <https://www.praxino.org/>の“Album of Stereo Cards”というタブをクリックすると、バランギガ虐殺および麻薬撲滅戦争による死体の写真が掲載されている。